

二の方へ入ったのは十何名でしょう。これが5回生ですわね。孤立とは言わないが、実際に少数民族だからなあ。

福山 三年生に入ったんでしょう？

奎谷 津田とか何とか、女傑……

福山 12名でしたか……？

奎谷 おもしろい話があってね、昼飯を一緒に食べないで、皆屋上へ上がって食べる。「先生、あれ何とかしてください」「お前ら、自分でやらんか」、そんな調子で、女子だけが屋上へ上がって弁当を食べて、他の者は教室で食べている。

曾谷 人数は少なかったですが、存在は随分目立っていました。

奎谷 向こうには椿先生というこわい先生が居られて、それを敬遠して来たのも居ったが、こっちにもこわい先生がいらっやってね、音楽の池尻先生ですわ。集まって騒いでいた時に、池尻先生に一喝喰らってね。(笑い) 芦屋へ来て“芦高の自由”と思っとったら、なかなかそうもいかないなと思って、(笑い) かなり彼女らも尻込みしたらしい。

クラブ活動の発展

——野球部の全国優勝を

はじめとするクラブの活躍

司会 記録に拠りますと、21年の夏に「全国中学校優勝野球大会」に野球部が出て、27年「全国高校野球選手権大会」に優勝する、という野球部の黄金期があるわけですが、その辺の話を福山先生お願いいたします。

福山 23年4月宮川小(旧校舎)に移った時に、私たちは総勢9名で着任しましたが、その内8名が私を含め新卒でした。「これでやっと授業が賄える」と、先生方も喜んでおられました。岡本仁先生も組合の専従で、他にも休職中の方など実際授業に出たおられたのは20何名でしたか。そういう時に私達が赴任し、学校の授業が一斉にできる態勢が整い、新制高校の時代が始まるわけです。新制高校1回生(芦高4回生)から教えたことになります。

私達が赴任するまでは、戦後の混乱期で校舎も点々と移動せざるを得なかった大変な時代です。今

からは想像もできない経済状態の中で、特に都市部は廃墟からの再建であり、教育の復興も百八十度転換した理念からの出発ですから、先生方のご苦勞も想像できるというものです。そのような中での野球部の活躍ですからどのような魔力を秘めているのかと思いました。

野球部結成の頃

野球部創立について岸先生からお聞きした話ですが、海技専門学校で体育大会を開いた時(昭和21年5月)、橋本、有本の両君が野球部の結成を申し込んできたが、職員会議で時期尚早ということで同好会から出発したそうです。私共が赴任しました時は、運動場もありませんし、どのように練習しているのかと一番に思いました。当時は、現在の赤塚山高校まで、放課後になるとバックヤバットを持って練習に出かけていました。さすがだ、やっとなるあと感じました。有本、田中、荒石君など5回生が中心で、6回生の水田、木下、渾大防君などが活躍していました。

草創期の部長と監督



野球部誌「翠球」

野球部の歴史ですが、野球部誌に「翠球」が発刊されております。故人になられた伊東糾先生が苦勞して作られたのですが、その中で各年度の部長や部員の思い出の記事である程度歴史を追うことができます。先ほどの男女の交流の記録ではないが、明らかに違ってる所もあります。例えば24年度は、岸先生は転任され居られないのに部長に名前がでています。この年は中村先生の筈です。詳細はともかく年表の部分に聞いた話と違っているところがあります。戦後の混乱と貧困の時に甲子園出場という偉業を成し遂げたのですから、学校の運営面特にクラブの担当者など種々困難があったであろうことは想像できますが、実態と記録をどう受け止めたらいのか迷いますが、正せるものは訂正しておいた方がよいと思います。

甲子園を目標に——その背景

全国優勝までのことですが、私も27年夏の予選の初めまで何等かの形で野球部を手伝っていました。一番の危機感というか困ったことは、有本君等5回生の主力選手が卒業した後の空虚感でした。まだ6回生の水田君を始めとする部員も残っていたから、何とかして後に続けと思ったのですが、思い通りには行きません。阪部校長にお願いして、「何とか学校も援助してもらえないか」と申し入れましたが、「資金援助は無理」との返事でした。25年は春の県下選抜大会（第一回）で優勝した以外は主な戦績はありませんが、その間も先輩の橋本君も顔を出してアドバイスなどしてくれましたが、何となく学校全体に橋本、有本時代の野球は終わったんだという感じが強かったように思います。そして既に岸先生は転任され、神保先生もご病気で、そのうえ中村先生まで途中転勤され、今まで野球部を見てこられた先生が一人も居なくなりました。私一人だけとなり一層その感を深くしたものです。

それより前（24年）、岡村先生が赴任され「野球を教える」との意志表示をしておられたのですが、25年私が部長を引き継いだ時、「私が監督になるから、福山君は部長になれ」とこれには少々驚きましたが……。いろいろありまして……。私は野球については素人並みで、始めは監督も居ないままでしたから、ご好意は有難かったのですが……。部員の意向もあり甲子園への大目標への道を考えざるを得ませんでしたので、この時はお断りしました。こうした時にたまたま古家氏が好意的に面倒を見るからとグラウンドに出てこられるようになったのです。部員も信頼していましたし……。ただ、野球経歴のある外部からの方のご好意に甘えるのは心苦しく、ボール代にも事欠く資金繰りには悩まされました。マネージャーの水無瀬君など随分苦勞しております。古家監督にもはっきり内情を申したんです。すると「それはよく承知している。それならそれで、私流に指導するから」と言われました。私は、「グラウンドのことだけに指導はとどめて下さい。教育的指導は私の責任ですから」と申し了解し合ったものです。その頃は意志も疏通し気持ちよく野球に邁進するこ

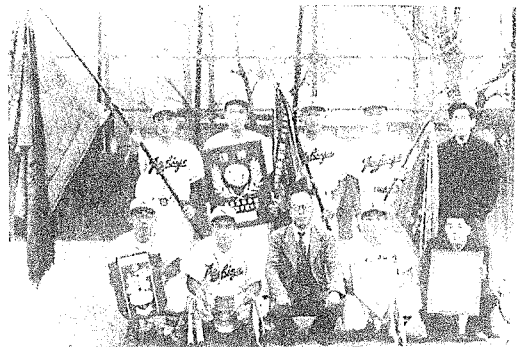
とができ幸いでした。氏は理論的野球を標榜されスケジュールに従っての練習でしたが厳しいものでした。私も随分野球をこの方から学んだものです。

優勝へ向けて猛進

全国優勝した年のことですが、予選が初まり新聞にも私の名前が初め出ていたのですが、飯野校長に突然選手と丸茂先生と私が呼ばれまして、「今日からは、部長は丸茂先生に、福山先生は副部長に」と申し渡されました。それまでに監督と学校側でどのような経緯があったのか存じませんでしたので、ということか解らず驚きました。その内監督が橋本君に決り合宿が始まります。野球部の連中も氣遣ってか「先生、相談したいのですが」と何人も来たのですが、胸の中に治まらぬものがありました。唯頑張りよう激励するにとどめました。全国優勝の甲子園出場の時の合宿については、家庭科の先生や食物研究部の生徒など多数参加して、学校全体が随分盛り上がっていました。これも甲子園という魅力でしょうか。地域の人々の実務的な援助なしに学校挙げての応援体制は、確かにエポックなことでした。

陰の苦勞話

また、こんなこともありまして。26年夏の予選合宿中でした。マネージャーの池田君から夜中電話で「先生一寸来てくれ」というので行きますと、岡村先生は心身共に疲勞しておられ、危惧する面もありましたので、そのまま交替してお世話することになりましたが、休日無しの激務でした。若さだけでカバーしたようにも思います。部員達の甲子園への夢



野球部—28年卒業アルバム写集から

を援助してやれるのは、それしかないとも思いまし

た。表面に出なかった裏話になりましたが、生徒の情熱を受け止める私達が、若さを武器に生徒達の活動を指導し応援できたことに、今でもすがすがしい印象として残っています。

草創期のクラブ創立

ですから当時（23・24年頃）は、「先生、何とかクラブの顧問やってくれないか」と、生徒からの申し入れが随分多かったです。私も野球を持つ前に、5回生の杉本、中山、福富君等が、バスケット部を創ると言っていて、甲南大学のグラウンドに出かけたり、何もありませんから、南側の広場（小学校の校庭だった）に、近所の大工さんに頼んでバスケット・ボードを作らせたのですが、図面を手書きで書いたり、焼跡からリングを捜してきたり、初代顧問の苦勞談です。とにかく無い無いづくしですから、創る喜びというものを教師も生徒も共有していたように思います。中西先生は「何も無くても、相撲はできる」とご自身も選手として出られ、部を創られた。その他沢山頼まれて顧問を引き受けておられた。生徒達は「僕たちの学校、この地に創造の火を燃やすのだ」という気構えのようなものに、私たちは感動を覚えたし、積極的に応援もし指導もしました。前夜祭で踊り方（ストーム）を知らないから一緒に踊り教えました。そのような雰囲気があるものすごく強かった。創って行こうという気持ちで生徒は動いていましたね。そんな印象が随分強かったと思います。



第4回記念祭・前夜祭

古き良き時代の芦高

司会 そういう生徒の非常に積極的な姿勢、気風とか学校の雰囲気や文化部の様子などを、中西先生お願いします。

中西 何しろ私達は、教師になり立てのぼやぼや

時代、偉そうに教師づらをしていても何もかも始めて、わからんことばかりでした。阪部校長先生をはじめ福田教頭先生は先輩先生方の経験豊かで心温まるご指導と実に素晴らしくはつらつとした自由自治の心で学ぼうとする生徒諸君の存在は、私にとっては偉大な環境だったことが思いだされます。新制高等学校発足、第1回生、第2回生、第3回生そして、併設中学生等には、いよいよ新しい意欲と熱意が充ちあふれていた。常に新しい問題を求め、発見してはその解決をはかり、先生も生徒も互いに豊かなふれあいの中で学んでいたというよき時代だったと思います。

芦屋高校在職15年3ヶ月の私ですから、思い出はいっぱいですが、面白おかしい私の綽（あざな）八戒について申しましょう。ある日、西宮コートでバレーボール大会があり、成績優秀での帰り道、当時のキャプテンO君から、「先生ハッカイに似てますね！」といわれたが、いったい何のことかピンともスツともわからなかった。「おわかりでなかったらご案内しましょう。」と阪神電車芦屋駅を下車し駅前の書店宝盛館まで行くと、店頭に並べられたマンガ本を見て下さいというのである。ドンドンひもといっていく中に「あった！アツク！これや！コレ、コレ！よう似とる！」と私の心は大動した。これが綽の決定的瞬間というものです。その後、芦高教師の数え歌の四番にも登場するのです。「四ツとセー、よちよち歩きは八戒さん天竺道中まだ遠い、そいつァー剛気だネ剛気だネー。」というのです。しかしよくも私の風彩、体格、表情、顔つき等からユニークなニックネームをつけて呉れたものよと、今日なお大事な思い出としています。

新制高校発足当時は、校舎、校具、校庭その他の改修、補修なども中々進まず美しい学校とは申せませんでした。生徒諸君の中には、少しでも美しく気持ちのよい学校にしようと、校門附近の清掃や机や椅子の修理などを手始めに同志が集まり、美化同好会が誕生したのです。私は、図画工作科の担当として当てられたのでしょうか？同好会の顧問となりました。勿論全国に魁けての快挙だったと思いま